法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-09

〈益田勝実の生涯と仕事〉益田勝実年譜

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
97
(開始ページ / Start Page)
4
(終了ページ / End Page)
23
(発行年 / Year)
2018-03-24

〈Ⅰ　益田勝実の生涯と仕事〉

益田勝実年譜

Ⅰ　誕生から十代、二十代

1923（大正12）年

6月29日、山口県下関市に生まれる。父繁蔵、母コフジの次男。5人兄弟（兄1人、姉3人）の末子として、下関市で生育する。下関の街中を歩き廻って探索するような少年だった。「家の学問として漢文を教わるチャンスがあって、小学校の終わりごろから『日本外史』や『十八史略』を読ませられていた」（『国語通信』170号《対談》1974・10）。「四囲海のところで育った」ので、魚を採って調理すること、それに泳ぐこと（近代泳法ではなく古式何流？）も得意だった（「私が育ったころの下関」（『法政通信』1984・1）。

下関中学時代には、文芸・思想の同人誌「其処迄（そこまで）」を編集・執筆（筆名　癇癪玉）。西洋哲学を専攻したい夢があり、中学3年の時から下関バプテスト教会の末崎富彌牧師にギリシャ語を習い始める。

1941（昭和16）年　　18歳

3月、山口県立下関中学校を卒業。4月、下関市立養治国民学校助教をしながら、中等教員検定試験をめざす。生徒たちに、自分は生涯「独学・独身」を通すと語る。

1942（昭和17）年　19歳

3月、養治国民学校を依願退職。4月、学費の安い二松学舎高等専門学校に入学（竹内実が同級）。「学資が続くうちに中等教員の国家試験に合格したいと焦っていました」（長姉・岡田アサノ著『わが足跡を振り返り』1976・2）。

1943（昭和18）年　20歳

12月、学徒出陣令により、広島の西部第十部隊入営（二松学舎高等専門学校仮卒業）。

二松学舎の出陣壮行会で、万葉学の森本治吉教授に「大君の醜（しこ）の御楯」として疑わずに出征せよと言われ、はたして防人歌はそう読むべきものだろうか、戦場まで『万葉集』を携行したのはそうした理由による（「万葉集を焼いた日」、『まんよう』婦人民主クラブ「万葉集講座」1969・1、3、5、7）。

1944（昭和19）年　21歳

12月、東京での幹部候補生教育終了。原隊（広島）に復帰するところ、負傷した友人（彼は広島で被爆した）の身代わりで「南支派遣軍」行きとなる。

1945（昭和20）年　22歳

中国各地の前線を転戦し、華南の最前線で8月15日（敗戦）を迎える。それまで持ち歩いていた『新訓万葉集』（岩波文庫上・下）を、敗戦の数日前に、もう生きては帰れないだろうと焼く（「万葉集を焼いた日（一）（二）」）。

1946（昭和21）年　23歳

5月、広東から復員船で帰国。コレラに感染していたため、船は浦賀沖に60日間も留め置かれる。そののち倉敷の長姉の家に辿り着いて、父の死を知る。下関の家も空襲で焼け、過去はいっさい消失していた。9月、母のいる小倉の兄のもとへ。〈故郷喪失〉の自己体験によって、国境前線で逃亡して捕えられた防人の心境がわかり始めた（「万葉集を焼いた日（三）」）。

1947（昭和22）年　24歳

投稿論文「播磨風土記は天平元年以後か」が（林屋辰三郎氏からの「君の投稿は今までの研究水準を越えているから掲載したい」とのハガキをもらい）11月、『日本史研究』（第6号）に掲載される。それによって東京へ出て行く気持がきまった（「万葉集を焼いた日（三）」）。

1948（昭和23）年　25歳

4月、東京大学文学部国文学科に入学。敗戦直後、東大が傍系の専門学校などの卒業生にも門戸を開いたことにより、「遅ればせながらその門から紛れ込んだ」（「私の卒業論文」『国文学 解釈と鑑賞』1971・10）。

大学入学いらい萩谷朴家の離れに下宿していた時期に、「外記補任」を見ていて『土佐日記』で紀貫之と交替した新任の国司を「島田公鑒（きみあき）」と発見し、『日本文学史研究 2』で考証。朝日古典全書『土佐日記』（萩谷朴校註、1969年刊）以後、明記される。

1949（昭和24）年　26歳

この年の春、住まいを町田市鶴川の安全寺とする。「日本文学史研究会」を主宰し、ガリ版刷りの機関誌『**日本文学史研究**』

を1年上の難波喜造、杉山康彦らと創刊する。第1号（8月1日刊行）の巻頭言に「我々は日本文学の研究が、今や自らの手で変革して行かねばならない時期に達した」「飽く迄具体的に、新しい研究の出発を準備する為、共同研究を突き進めよう」と謳う。11月20日、第2号刊行。執筆者に秋山虔が加わる。

1950（昭和25）年　27歳

4月、日本学園高等学校（東京都）講師となる。『日本文学史研究』を第3号（1月）から第8号（12月）まで立て続けに出す（執筆者に高橋和夫、萩谷朴、今井源衛らが加わる）。この間の論稿に、「上代文学史稿案（一）～（四）」や「古事談と宇治拾遺物語の関係」などがある。

1951（昭和26）年　28歳

2月、日本学園高等学校を依願退職。3月、東京大学文学部を卒業。引き続き東京大学大学院に在籍。

4月、東京都立神代高等学校（定時制）教諭となる。4月、「古代文学史の方法と課題」を発表（『文学』19-4）。

この年の『日本文学史研究』は、第9号（1月）から第15号（12月）まで（執筆者に久曽神昇、藤岡忠美らも加わる）。論稿としては「**源氏物語の荷ひ手**」があり、〈英雄時代〉や〈私家集研究〉が取り上げられる。別巻「日本文学史研究会叢書1」として、8月、『**紫式部日記の新展望**』（大学2年生時の、池田亀鑑ゼミの単位レポート）を刊行。

大学の卒業論文は「日本古典文芸研究に於ける基礎的諸問題の再検討」と題し、「これだけの考えごとをした、と自己の日常の軌跡を確認するため、書いただけ」「全部で十七冊」「おおよそで2800枚から3000枚の間」の「学習ノート集成」を久松潜一・池田亀鑑に提出（「私の卒業論文」）。

Ⅱ　大学卒業後の十五年

1952（昭和27）年　29歳

1月、「全本「**富家語**」**の研究**（上）」、8月（下）（『季刊国文』1、2）。『日本文学史研究』は、第16号（1月）から第18号（8月）まで（執筆者に石村正二、野村精一、河北騰らが加わる）。4月、「日本文学史研究会叢書2」として『論叢紫式部日記』（執筆者に池田亀鑑、むしゃこうじ・みのる等）を刊行。

この年から、神代高校定時制の卒業生を中心メンバーとする「サークル・いしずえ」を主宰。以後、読書学習、地域の生活向上、民俗・民謡採集調査など地域の社会文化活動に従事する。

1953（昭和28）年　30歳

1月、「**防人等**」（『万葉』6）。『日本文学史研究』は5月の第20号（執筆者に奥村恒哉、岡田清子らが加わる）をもって終刊とする。6月、「日本霊異記」（『国民の文学・古典編』）。ここで初めて「**私度僧**」たちへの視点を提示し、仏教文学を理解する上で重視する。6月、「源氏物語のいのち」（『日本文学』2-4）。この時期は「文学史」への志向と作品を生む歴史意識への関心が強く、その源氏論も「作品の外側からの歴史状況論で、作品のなかみを扱っていなかった」と後に述懐される（「源氏物語から学んだこと」1991年10月『源氏物語講座1』勉誠社）。

1954（昭和29）年　31歳

2月、「源氏物語の端役たち」（『文学』22-2）。7月、「今昔物語の問題点」（『日本文学』3-7）。

1955（昭和30）年　32歳

4月、法政大学文学部（日本文学科）非常勤講師（以後11年間）。7月、「**海さち山さち—神話と教育—**」（『文学』23-7）、「しあわせをつくり出す国語教育について（一）」、8月（二）（『日本文学』4-7、4-8）。

1956（昭和31）年　33歳

3月、「**文学作品としての古事記**」（筑摩書房の教科書『国語一』の学習指導の研究）→最終的に『火山列島の思想』に「**王と子—古代専制の重み—**」として採録（1968・7）。7月、「**平家物語・橋合戦**—高校国語（乙）教材の研究—」（『日本文学』5-7）。

1957（昭和32）年　34歳

2月、「柿本人麻呂の抒情の構造—反歌の特色—」（『日本文学』6-2）。4月、「『古事記』における説話の展開」（『古事記大成2／文学篇』）。

8月以降、「いしずえ」のメンバーとともに、調布・飛田給の日米行政協定道路闘争に発案から参画。地元民一丸の運動の結果勝利し、調布飛行場の新甲州街道以南の4分の1の土地を取り戻した。

1958（昭和33）年　35歳

1月、「大伴旅人—梅花の宴前後—」（『国文学』3-1）→『火山列島の思想』に「**鄙に放たれた貴族**」の前半部として採録。

8月、「信貴山縁起の詞章」（『日本絵巻物全集2／信貴山縁起』）。「**古代説話文学**」（岩波講座『日本文学史1／古代（1）』）。

10月、雑誌『**民話**』（民話の会編集）が創刊され、編集委員として参画（他の編集委員は、木下順二、西郷竹彦、竹内実、

宮本常一ら。『民話』は１９６０・１０の第２４号で終刊）。１２月、「**古代説話文学における表現の問題**」（『文学』２６−１２）。この年、高校国語教科書『国語総合』（筑摩書房）が刊行され、西尾実の勧めにより編集委員として参画（他の委員は、臼井吉見、西尾光一、野本秀雄、分銅淳作、峯村文人の各氏）。その後、編集委員に異動はあるが、益田は１９８４年度用高校国語教科書まで続ける。

１９５９（昭和３４）年　３６歳

３月、「**桐壷の院**」（『**日本文学誌要**』**復刊２号**）→『火山列島の思想』の「**日知りの裔の物語**―『**源氏物語**』**の発端の構造**―」の基となる。これは、それまでの「文学史的関心」と「考証的なこだわり」の「二面をどうやら融合できそうに思えてきた」論とされる（「源氏物語から学んだこと」）。

１１月、「『炭焼日記』存疑（一）」、１２月（二）、翌２月（三）（『民話』１４、１５、１７）。

１２月、「自著論文目録（１９４７〜１９５９）」ノート（１）を作成。扉に「**名を売るな　真の学問実践の必要に基いて書け、商業資本の手先になるな**」と記す。

１９６０（昭和３５）年　３７歳

２月、最初の著書『**説話文学と絵巻**』（三一書房）を上梓。「説話集のこまかな考証ばかりやっていたそれ以前」を脱して、「文学の内部に反映するもので歴史を見ようとする方法」でなされた論集（「あとがき」）。この本をテキストにした「特講」の最初の授業（１９６５年）で、定価が２７０円から５８０円に貼り替えられていることを学生たちに頻りに詫びた。

1961（昭和36）年　38歳

1月、「炭焼き翁と学童」（『文学』29-1）。7月、「弓射る師弟―『徒然草』の一背景―」（『日本文学』10-6）。10月、「国語教師・わが主体」（『教師のための国語』）。

1962（昭和37）年　39歳

4月、ゼミ生のレポート集『古代文学論叢Ⅰ 源氏物語の終幕』の「はじめに」に、これらは「安保反対運動の渦巻の外にはいなかった学生たちの所産」と位置づけ、「現実と学問研究との統一点はたやすく見出せない」が、「文献学的考証学的研究を、文芸学的研究と遊離させたくない」と記している。

8月、「『平家物語』作者のおもかげ」（『文学』30-8）→手を入れて『火山列島の思想』「**飢えたる戦士―現実と文学的把握―**」として収録。10月、「**心の極北―尋ねびと皇子・童子のこと―**」（未発表）→6年後の『火山列島の思想』に収録。12月、「**フダラク渡りの人々**」（『日本古典文学新論―近藤忠義教授還暦記念論文集―』）→『火山列島の思想』に収録。

1963（昭和38）年　40歳

9月、「日本文学の発生―序説の序説―」（『日本文学』12-9）→これを書き直して『火山列島の思想』「**幻視―原始的想像力のゆくえ―**」として発表。

1964（昭和39）年　41歳

1月、「**偽悪の伝統**」（『文学』32-1）→『火山列島の思想』に収録。「**民俗の思想**」（『現代日本思想大系30／民俗の思想』筑摩書房）編集・解説。

8月から9月までの間、山代巴連続講演会（5回）を主催（於・調布市「サークル・いしずえ」）。

1965（昭和40）年　42歳

2月、「貴族社会の説話と説話文学」（『国文学 解釈と鑑賞』30-2）。5月、「**火山列島の思想—日本的固有神の性格—**」（『文学』33-5）→単行本『火山列島の思想』（1968年）の三番目に置き、この論文名を書名とする。「**廃王伝説—日本的権力の一源流**」も同時執筆（発表は1966年秋の早稲田大学国文学会で「日本の神がかり」）→『火山列島の思想』に収録。5月から翌年4月まで、「**古事談鑑賞**」（1）～（11）（『国文学 解釈と鑑賞』30-6～31-5）。7月、「柳田國男の思想」（『現代日本思想大系29／柳田國男』解説）。

Ⅲ　法政大学専任での二十三年間

1966（昭和41）年　43歳

3月、東京都立神代高等学校（定時制）を依願退職。「卒業後、十五年間、夜学教師の生活と農村文化運動に埋没していた」「国文学研究者としては大きなクレパス」（「私の卒業論文」）と記すが、大学就任の際に提出された膨大な論文業績は、巻紙に記されていたという。

4月、法政大学文学部助教授となる。9月、「**黎明—原始的想像力の日本的構造—**」（『文学』34-9）→『火山列島の思想』に収録。12月、「中世的諷刺家のおもかげ—『宇治拾遺物語』の作者—」（『文学』34-12）。

1967（昭和42）年　44歳

4月、法政大学文学部教授となる。7月、「フィクションの出現―竹取物語」（『日本文学の歴史3』角川書店）。10月、小田切秀雄の勧めにより、婦人民主クラブの文化事業として「万葉集講座」を始める（月1回のペースで、87年9月まで）。

1968（昭和43）年　45歳

7月、単行本『**火山列島の思想**』（筑摩書房）を上梓。日本人がどのような思想を築いてきたかを探索した十一編の論文集。書名に関しては、「自分の心中の考え」から言えば「《日本陸封魚の思い》と名づけたかった」と「あとがき」に記す。（1993年1月、新装版「ちくま学芸文庫」として再刊。2006年2月『益田勝実の仕事』全5巻の2（筑摩書房）に収録。2015年11月「講談社学術文庫」で再刊。）

1969（昭和44）年　46歳

1月、「万葉集を焼いた日（一）」、3月（二）、5月（三）、7月（四）（万葉集講座『**まんよう**』）。

11月、「大学」が最も大変な時に、法政大学文学部長となる（1970年3月31日まで）。

12月、「壬申の乱―歴史の転換期と文学―」（『国文学』14-16）、「常世の国発見事業」（『伝統と現代』2-11）。

1970（昭和45）年　47歳

1月、「夫の狩り立て―古代の日常的暴政―」（『日本文学』19-1）。6月、「すれ違いの伝統」（『季刊・人間として2』）。

1971（昭和46）年　48歳

4月、「**秘儀の島（上）—神話づくりの実態—**」、5月（中）、6月（下）。玄界灘に浮かぶ沖ノ島の遺跡に神話づくりの実態を読み解く（『文学』39-4、5、6）。→1976年刊行の単行本『秘儀の島』の書名とする。

4月より成蹊大学非常勤講師（断続的に、1991年3月まで）。4月、「こちら側の問題」（『南方熊楠全集2』解説）。5月、「常世の虫の神・蝶の神」（『上方芸能』18）。11月、「**日本の神話的想像力**」（『文学』39-11）→『秘儀の島』に、サブタイトル「神話の文法」として収録。

1972（昭和47）年　49歳

1月、「**日本の神話的想像力—神異の幻想—**」（『日本文学』21-1）→『秘儀の島』の冒頭にタイトル「神異の幻想」として収録。

5月、単行本『**記紀歌謡**』（「日本詩人選 1」筑摩書房）を上梓。記紀の歌謡を万葉和歌と関わらせながら《抒情以前の抒情》の時代に〈歌謡劇〉や〈大王伝承〉を見出した、書き下ろしの論著。

12月、「古代日本人のイメージ」（『ENERGY』9-4）→この稿の一部をふまえて『秘儀の島』に「**久遠の童形神—イメージの化石を掘る—**」として収録。

1973（昭和48）年　50歳

1月「『紫式部日記』考証の方法（一）」、2月（二）、6月（三）（『日本文学』22-1、2、6）。3月「紫式部の身分（一）」、4月（二）、5月（三）（『日本文学』22-3、4、5）。9月「**古代人の思想**」、11月「**神道**」（ともに『日本の社会文化史・総合講座』「1原始・古代社会」と「3土着文化と外来文化」）。12月、「有由縁歌」（『万葉集講座 4』）。

1974（昭和49）年　51歳

4月、東京大学非常勤講師（断続的に、1983年3月まで）。8月、「天皇史の一面」（『終末から』8）。9月、「歌舞と説話」（『日本生活文化史3／日本的生活の起点』）。11月、「**習俗の思想**」（『現代思想』2-10）。

1975（昭和50）年　52歳

1月、「**古代の想像力**」（『講座・古代学』）→『秘儀の島』にサブタイトル「折口信夫のふみあとで」として収録。3月、「**モノ神襲来―たたり神信仰とその変質―**」（『法政大学文学部紀要』20）→『秘儀の島』に収録。

4月、「古代村落の空間構造」（『現代思想』3-4）→この稿をふまえて『秘儀の島』に「**聖地籠もり―日本神話の創造・再生の空間―**」として収録。4月、《コラム》文学のひろば（『文学』43-4）で梅原猛の『水底の歌』を批判し、論争の口火を切る。10月、「**読み・潜在への旅―近親相姦神話の周縁で―**」（『エピステーメー』創刊号）→『秘儀の島』にサブタイトル「ひとつの記紀神話の座標を求めて」として収録。12月、「アポロギアとアポリアと―梅原猛氏に―」（『文学』43-12）。

1976（昭和51）年　53歳

3月、「民話の思想―伝承的想像の超克―」（『伝統と現代』7-2）。

8月、単行本『**秘儀の島**』（筑摩書房）を上梓。歴史残留そのものとしての自己と人間の内部からテキストを深く読み抜き、原初の神話的想像力を探究した九編の論文から成る。

1977（昭和52）年　54歳

2月、「左遷官吏の悲哀―大伴家持―」（『人物群像・日本の歴史3／天平の開花』）。9月、「神話のなかの女」（『伝統と現代』

8-6)。「紫式部外伝」(『文学』45-9)。11月、「神話的想像力」(『講座・日本文学・神話 上』)。12月、「そらみつ大和」(『国語通信』202)。

1978(昭和53)年　55歳

1月、「神話的想像の表層・古層—記紀にみる古代人のこころ—」(『歴史公論』4-1)。2月、「夢の浮橋のイメージ」(『日本文学』27-2)。3月、「『北越雪譜』のこと」(『北越雪譜』解説　岩波文庫・新訂版)。

1979(昭和54)年　56歳

1月、「言霊の思想」(『言語』8-1)。5月、「〈内なることばの国〉建設のために」(『国語通信』216)。10月、「**挨拶の歌**」(『短歌の本1/短歌の鑑賞』)。11月、「八千矛の神のうた」(『現代詩手帖』22-11)。

1980(昭和55)年　57歳

2月、「**詩妖の思想—ワザウタ語源考—**」(『日本文学誌要』23)。3月、「**『大鏡』とその作者**・鑑賞の要点」(『平安文学選/学習指導の研究』筑摩書房)。

4月、慶応大学非常勤講師(1983年3月まで)。5月、「文学史上の『古事記』」(『文学』48-5)。5月から11月まで、「**美術に見る日本の説話**」1〜30(『週刊朝日百科・世界の美術』111〜140)。6月、「言談の風景—説話文学会九月例会—」(『説話文学研究』15)。

12月7日、14日、21日、28日(全4回)「世界ノンフィクション『北越雪譜』」(NHKラジオ第二放送)。

1981（昭和56）年　58歳

3月、単行本『**国語科教育法**』（法政大学通信教育部テキスト）を刊行。「古典教育と呼ばれるもの」（『文学』49-10）。10月、「宮本常一論の瀬ぶみ」（『民話の手帖』8）。

1982（昭和57）年　59歳

1月、「折口をふまえて柳田をどう見るか」（『国文学』27-1）。6月、「《シンポジウム》『江談抄』と『古事談』」（『説話文学研究』17）。7月、「《座談会》表現としての『源氏物語』」（『文学』50-7）。11月、「光源氏の退場―「幻」前後―」（『文学』50-11）。

1983（昭和58）年　60歳

3月、「神風考」（『文学』51-3）。6月、「浮舟の出家」（『日本語学』2-6）。10月、「**古代人の心情**」（『講座・日本思想1／自然』）。

1984（昭和59）年　61歳

1月、単行本『**古事記**』（岩波書店）を上梓。『古事記』に史実を読み取るのではなく、上巻、中・下巻ともに、あくまでも〈神話的伝承〉で読む、書き下ろしの論著。伝承の中に日本的な想像力を解明することを、生涯の仕事とした。5月、「かなぶみに型がなかった頃―『紫式部日記』作者の表現の模索―」（『国語と国文学』61-5）。7月、「共同的創造から個の文学へ―説話と説話文学―」（『国文学』61-5）。7月6日、《講演》「柳田國男の その詩の別れ」（法政大学国文学会大会）。

1985（昭和60）年　62歳

3月、「『江談抄』異聞の発生―古態本段階での一ケース―」（『法政大学文学部紀要』30）。7月、「伝承から物語へ―竹取物語の成立―」（『国文学』30-8）。11月、「柳田国男・その詩の別れ」（『日本文学誌要』33）。

1986（昭和61）年　63歳

11月、「『大斎院前の御集』の本文復原の瀬ぶみ」（『文学』54-11）。12月、「遣唐少録山上憶良外伝」（『日本文学誌要』35）。

1987（昭和62）年　64歳

2月、「新しい古代文学史像を求めて―わたくしの場合―」（『国文学』32-2）。7月、「大力女譚の源流」（『日本文学誌要』37）。11月、「神々の愛―日本神話に見る―」（『日本の美学』11）。

12月、「著作論文目録」（自1971年、至1987年）ノート作成。以後、1988年から94年まで書き足す。

1988（昭和63）年　65歳

1月10日、「**こころの時代・神とのふれあい**」（NHK教育テレビ）。

3月、「「班竹姑娘」の性格―『竹取物語』とのかかわりで―」（『法政大学文学部紀要』33）。6月、《座談会》「月・潮・風―『万葉集』巻第一、八番―」（『文学』56-6）。10月、《対談》「歴史学への志―『石母田正著作集』発刊に際して―」（「図書」471）。7月、法政大学国文学会大会で退職記念の講演として「**夢の浮橋再説**」→発表は翌年2月の『日本文学誌要』40。10月、「中世説話と音楽譚の伝播」（『岩波講座・日本の音楽・アジアの音楽3／伝播と変容』）。

Ⅳ　定年退職後、そして晩年

1989（昭和64・平成元）年　　66歳

1月2日、オシドリを見に行った大野池（山梨県）に落ち、長時間水に浸かる。

3月、「熱田津に船乗りせむと」の歌箋―『万葉集』巻第一の八番―（『法政大学文学部紀要』34）。《座談会》「**天皇、昭和そして私**」（『思想の科学』451）。

3月末、法政大学文学部を定年退職。24日の最後の卒業式に、体調不良で出席できず。4月、《シンポジウム》「**記紀の歌謡と説話**」（『上代文学』62）。7月、「**古代想像力の表現過程―わたくしの国文学―**」（『国語と国文学』66-7）。

1990（平成2）年　　67歳

1月、《座談会》「研究の対象としての文学―学から楽へ・楽から学へ―」（季刊『文学』1-1）。

3月、**岩波セミナー「日本説話文学の展開―想像力のはたらき―」**20日、27日、4月3日、10日、17日（全5回）。

7月7日、《講演》「宮澤賢治素描―民俗とのかかわりから―」第8回池田弥三郎記念公開講演会（洗足学園魚津短期大学）。

9月、《講演》「**日本における抒情のうたの出現過程―歌謡からどう離脱したか―**」（『国文学 言語と文芸』）。

1991（平成3）年　　68歳

3月、萩谷朴氏の定年を祝う拡大「赤堤会」で、スピーチ。10月、「**私の源氏物語研究・源氏物語から学んだこと**」（『源氏物語講座1／源氏物語とは何か』勉誠社）。

1992（平成4）年　69歳

4月、「幻想者賢治の冷夏とのたたかい―微後世的同時代人の眼で―」（季刊『文学』3-2）。8月、「近藤忠義―歴史社会学的研究方法―」（『国文学 解釈と鑑賞』57-8）。12月25日、鈴木日出男氏と『竹取物語』に関して対談→翌年4月の『国文学』に掲載。

1993（平成5）年　70歳

1月7日、ちくま学芸文庫版で『**火山列島の思想**』、解説 鈴木日出男（筑摩書房）を復刊。

4月、《対談》「**フィクションの誕生**―益田勝実氏に聞く―」（『国文学』38-4）。7月、「**神話と歴史―わたくしの直面している問題点**―」（『古代文学講座1／古代文学とはなにか』勉誠社）。10月28日、広末保氏の葬儀に参列。

1994（平成6）年　71歳

2月、「**万葉の海―航海**―」（『万葉』149）。4月18日、金沢文庫に行った際、裏山で二度転ぶ。7月13日、法政大学文学部で同僚だった岡崎昇氏の葬儀に、水戸まで出かける。12月、「天変地異―伝承と陰陽五行思想のはざま―」（『古代文学講座6／人々のざわめき』勉誠社）。

1995（平成7）年　72歳

8月23日、歩行困難となって初めて都立府中病院（脳神経内科）の診察を受け、多発性脳梗塞と診断される。病院嫌いであったが、主治医の川田明広医師が下関中学（現・下関西高校）の後輩に当たり、信頼関係を持つことができた。2か月入院し、退院後は自宅療養となる。

2001（平成13）年　78歳

8月、「サークル・いしずえ」の人たちと自動車3台を連ねて秋山郷（新潟と長野にまたがる山間）に出かける。車椅子で遠出した最後となる。

2002（平成14）年　79歳

11月23日、姪の小沢邦子が退職金で購入した家（武蔵野台の車返団地）を提供され、病室とする。身体の不自由だけでなく次第に目も見えなくなり、「読書」はもっぱら岡田清子の朗読による、耳からのものだった（一日平均5、6時間）。

2003（平成15）年　80歳

7月、『日本文学誌要』（68号）に「**益田勝実著作・論文目録**」を掲載（これを基にして後に、ちくま学芸文庫第5巻の「目録」が成る）。

2005（平成17）年　82歳

6月9日、筑摩書房から学芸文庫で『益田勝実の仕事』（全5巻）刊行を決定。

6月28日、誤嚥性肺炎で府中病院に入院。7月28日、（せめて学芸文庫が刊行されるまでは、と）胃ろう手術を受ける。

↓2か月入院。

2006（平成18）年　83歳

2月10日、ちくま学芸文庫『**益田勝実の仕事**』**2巻**（火山列島の思想）を刊行。以後毎月1巻ずつ、3月、**3巻**（記紀歌謡）、

4月、**4巻**（秘儀の島）、5月、**1巻**（説話文学と絵巻）、6月、**5巻**（国語教育論集成）を刊行。

11月、『益田勝実の仕事』（全5巻）に対して、毎日出版文化賞（企画賞）が授与される。27日の贈呈式では、岡田清子が登壇して挨拶。

2008（平成20）年　85歳

7月、浅見和彦編『「古事談」を読み解く』（笠間書院）に、「古事談鑑賞1～11」（1965～66年に『国文学　解釈と鑑賞』に連載された11回分）が再録される。

2010（平成22）年

2月6日、老衰により自宅で逝去（享年86歳）。公表はされず、14日に身内による野辺送りが行われた（府中の森 市民聖苑）。朝日新聞をはじめ新聞各紙が一斉に訃報を報じたのは、3月22日。

4月18日、秋山虔先生の発案で「益田先生を偲ぶ会」を、『益田勝実の仕事』に携わった者たちで持った（神楽坂 出版クラブ）。5月22日、法政大学の日本文学科と国文学会とを発起人とする「益田勝実先生を偲ぶ会」を開催（ボアソナード・タワー25階ラウンジ）。

2015（平成27）年

11月10日、講談社学術文庫で『火山列島の思想』（解説 荒川洋治）復刊。

12月25日、三浦佑之編による『日本列島人の思想』（青土社）刊行。

２０１７（平成２９）年

６月３０日、大浦康介編『日本の文学理論 アンソロジー』（水声社）の「７、起源論・発生論」に、『火山列島の思想』の「幻視―原始的想像力のゆくえ―」より一部抜粋。

（作成　天野紀代子）

この「年譜」に掲載した論文は益田勝実の代表作です。全論文名のリストと復元は、以下の「目録」と「サイト」を見て下さい。

▼益田勝実 著作論文目録　→　『益田勝実の仕事５　国語教育論集成』（筑摩書房）５４６～５８９ページ

▼益田勝実 論文サイト　→　https://www.dropbox.com/ja/

「ログイン」メール　Kazanrettou1968@gmail.com

「パスワード」Masuda1968

※益田勝実先生の論文保存が、ＰＤＦで進められています。

（作成　鈴木和仁・今泉隆裕・加藤博之）